HCAP15 期
活動報告書

P.2 HCAP について

P.4 ハーバードカンファレンス

P.7 東京カンファレンス

P.14 独自企画

P.21 収支報告

1. HCAP とは

HCAP(Harvard College in Asia Program) は、ハーバード大学に本部を、アジアの 9 つの国 と地域のトップレベル大学に支部を置く、学生主体の団体です。学生間でアメリカとアジア各国の架け橋となるような関係を構築するため、学術・文化・交流を軸に学生会議や交流活動を行う「カンファレンス」を開催しております。その日本支部である HCAP 東京大学運営委員会は、東京大学公認の学生団体です。「ハーバードカンファレンス」（毎年 1 月にハーバード大学にて行われるカンファレンス）への参加と「東京カンファレンス」（例年 3 月に日本にて行われるカンファレンス）の主催を二本柱として活動しております。今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により、「ハーバードカンファレンス」はオンラインで 1 週間、「東京カンファレンス」は「Online Exchange Conference」と名前を変えて、8 都市の支部が集って 3 日間にわたり開催されました。東京支部は、ソウル支部と合同で 1 日を使用して企画・開催しました。また、例年の活動が縮小されたことを受け、15 期独自企画を 3 月に実施しました。

2. 代表挨拶

2021 年 3 月 19 日から 21 日にかけ、HCAP 東京大学運営委員会 15 期（以下 15 期）は Online Exchange Conference 2021 を開催致しました。世界中が新型コロナウイルス感染症の脅威に晒される中で、例年とは全く異なる形態での活動となりましたが、それでもカンファレンスを開催できたのはひとえに日頃よりご支援ご協力を賜っている個人様・団体様・企業様のおかげです。この場を借りて心より御礼申し上げます。

昨年春、戸惑いばかりで始まった大学生活は思い描いていたそれとはかけ離れたものでした。あらゆる場所でオンラインへのシフトが叫ばれる中、私達は「今後のオンライン交流のモデルとなるような、今できる最高の国際交流」を実現することを目標としました。途中何度もカンファレンスのフォーマットが変更され、長引く緊急事態宣言から準備が進まず、対面で開催できないことでモチベーションが低下するなど、例年とは全く異なる試練に直面しましたが、最後まで「今できる最高の国際交流」を目指してあがき続けることができたことは、私達の誇りです。

当然、価値観の異なるメンバーでいかに 1 つのものを作り上げるか、”自由の不自由さ” の中でどう前進するか、”面白い” ものとは何かといった、所謂 HCAP らしい問題にも直面し、1 年間向き合い続けました。そうして得た濃厚な他者理解の経験と、跳ね返って得られる自己理解とは、今後私達が社会に漕ぎだす際の羅針盤となります。まだ「何者でもない」私達が、それぞれの進む道で力を蓄え、社会を導く船頭となることこそが、多くの方にご支援いただいた意味であり、HCAP の一員たる意味でもあると考え、今後もそれぞれの道で研鑽を積んでいきます。

最後になりますが、皆様の温かいご支援に改めて感謝申し上げます。今後とも HCAP が東京大学の 1 年生にとって最高峰の成長の場であり続けることを願い、挨拶とさせていただきます。

髙野広海

3. 協賛・協力（敬称略）

協賛

株式会社ベネッセコーポレーション Route H
株式会社ベネッセコーポレーション Global Learning Center
株式会社プレジデント社　プレジデントファミリー編集部
東大駒場友の会
顧問 東京大学大学院総合文化研究科・教養学部 教授 松田恭幸

HCAP 東京カンファレンス 2021

「教育とレジリエンス」企画　経済産業省　サービス政策課長 (兼) 経済産業室長　浅野大介
「ビジネスとレジリエンス」企画　日吉屋　5 代目当主　西堀耕太郎
「災害レジリエンス」企画　首都圏外郭放水路
株式会社ベネッセコーポレーション 英語・グローバル事業開発部 グローバルラーニング課 Route H 責任者 尾澤章浩
有限会社島金商店　代表取締役　島英人
石巻専修大学　経営学部　李東勲教授
石巻日日新聞　武内宏之 元報道部長

HCAP15 期独自企画

・「Sanctity of Life and Death with Dignity」企画
ジュネーヴ大学 倫理歴史人文科学研究所教授 Samia Hurst
ライデン大学 中国 / 日本 / 韓国 / 東南アジア研究学士課程学生大使 Michon Leenders
DIGNITAS Silvan Luley
・「セックスワークを知る」企画
一般社団法人ホワイトハンズ代表理事 坂爪真吾
一般社団法人 Glow As People 広報 柳田あかね
地域派遣型リフレ JKMAX 店長
地域派遣型リフレ JKMAX スタッフ
・「近未来の食卓を想像せよ！」企画
Aleph Farms 研究開発担当本部長 Neta Lavon
Aleph Farms 市場開発担当本部長 Gary Brenner
・「シナリオプランニング」企画
キリンホールディングス Kirin Well-being Design Lab
・「” 水の古都” 東京」企画
東京大学大学院工学系研究科教授 知花武佳

4. ハーバードカンファレンス

4-1 概要

主催：HCAP 本部
日程：2021 年 1 月 17 日（日）~1 月 24 日（日）（本紙では全て日本時間で記載）
参加：HCAP 本部、HCAP 東京支部、HCAP ソウル支部、バンコク支部、HCAP 香港支部、HCAP イスタンブール支部、HCAP ムンバイ支部、HCAP シンガポール支部、HCAP 台北支部
形式：オンライン（Zoom を使用）

4-2 プログラム詳細報告

（1）学術企画　-academic program-

学術企画総括

新型コロナウイルスの流行や BLM 運動の盛り上がりなど、変動する世界を反映して、今年のカンファレンスのテーマは”Resilience and Reform: Adapting to a Changing World”であった。そのテーマに沿い、Business and Innovation, Media and Representation, Education, Identity and Society, Health and Healthcare について合計 5 回の学術企画が行われた。Business and Innovation は対談形式、残り全ては Zoom での講義形式で行われた。複数のスピーカーが用意され少人数のブレークアウトルームで行われたことで、内容に対する質問が増え、よりインタラクティブで学びの多いセッションとなった。

Business and Innovation

ビジネススクールの教授である Shane Greenstein 氏とアメリカ Huawei でリスクマネジメントとパートナー企業関係を担当されている Tim Danks 氏の対談形式で行われた。巨大サプライチェーン、そのリスク管理方法、AI 時代のプライバシー保護、5G/6G の未来、社会的責任など、世界で注目を集める Huawei 社幹部ならではの話を聞くことができた。膨大なパートナーシップ企業を抱える中で、多様な形での協力体制が構築されて維持されていることが印象的だった。また、現在 5G の先の 6G の研究が行われているという話や、新時代の車についての”1 + 8 + n Strategy”など、技術の面でも興味深い話が多く学べた。

Identity and Society

バーモント大学で社会学を研究されている Nikki Khanna 氏、青山学院大学経済学部の教授である Chelsea Schieder 氏、ウェブスター大学教授の Yin Lam Lee-Johnson 氏の 3 名がゲストとして招かれた。Chelsea Schieder 氏は 16 歳で初めて日本に来た際、ホストペアレンツが学生運動の経験者であり、所謂日本の大人しい国民性とのギャップを強く感じたことから、戦後の学生運動やそれにおけるジェンダーの役割について長年研究されている。日本の社会背景を理解していることもあり、非常に深いレベルで講義を楽しむことができた。現在の日本であまり社会運動が起きないこと、また特に若者の政治的関心が低いことの要因として、学生運動のイメージから社会運動が暴力性と結びついているという説明をされていたことが最も印象に残った。

（2）文化企画　-cultural program-

文化企画総括

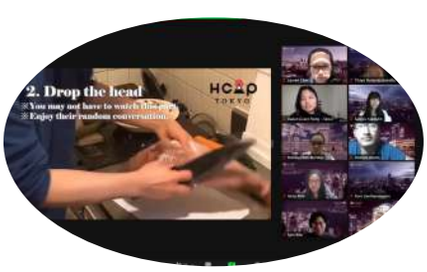
例年はハーバード大学構内やボストン市を巡るツアーなどが行われる文化企画だが、他の企画と同様にオンラインでの開催となった。それでも、オンラインで出来る限り例年と同じレベルの文化交流を実現しようとするHCAP 本部の思いが強く感じられ、zoom のチャットでの会話など、例年にはない楽しさも経験することができ、思い出深い企画となった。

Cooking & Craft

ハーバード生と共にそれぞれの国の料理・工作をオンラインで作る企画で、東京支部は定番の手巻き寿司と折り鶴を作った。オンラインのため、準備がしやすく簡単なものを選んだが、それでも巻き寿司の具材の多様性が面白く、折り鶴に関してはハーバード生に知っている人がいて逆に私達が教えられるという場面もあった。ハーバード生はそれぞれの文化的な背景についても興味を持ったようだった。対面で行えれば尚楽しい企画であったが、それでも何かを一緒に作るという経験を通じて密度の濃い交流ができた。

タレントショー

各大学がそれぞれの国の特徴ある出し物を動画にして披露した。東京大学からは Finger Dance や魚捌きなどを披露した。その他では、ムンバイチームのインド舞踊が特に印象深く、各大学の雰囲気がとても伝わってきた。Zoom のチャットが常に盛り上がっており、チャットで発言するのを恥ずかしがる人が多い日本との違いを最も強く感じた経験となった。



ハーバードキャンパスツアー

ハーバード生がキャンパスを紹介する1時間以上のビデオを作成し、それを鑑賞した。個人的には、1度だけハーバード大学のキャンパスを訪れた経験があり、その時のことを思い出しながらキャンパスの重厚な雰囲気を味わうことができた。ガイドの2人以外に出歩いている人が殆どおらず、改めてコロナウイルスの影響を強く感じた。

（3）交流企画　-cultural program-

交流企画総括

交流企画では、Jeopardy、ハーバード生とともにゲームをする中で関係を深める Game Night、趣向が凝らされた謎に挑む Olympics、最も輝く HCAP メンバー 3 人を決定する Pagent が実施された。カンファレンスがオンライン開催となったことによる影響を最も大きく受けたのがこの交流企画であると言えるが、各国の HCAP メンバーはチャット機能等をを活用することで企画を盛り上げ、オンライン上での活発な交流を実現させた。

Jeopardy

アメリカのクイズ番組「Jeopardy!」をパロディにした企画で、HCAP 各支部のメンバーが混合したグループを作り、各国の歴史や文化、地理を題材にしたクイズに回答して得点を競った。クイズの元になった国出身のメンバーが他支部のメンバーにヒントを教えるなど、支部同士の交流が活発であった。

Game Night

各国の HCAP メンバーとハーバード生がグループになって、それぞれゲームをした。グループによって実施するゲームは異なり、東京チームは、Skribbl というオンライン上で絵を描いてそれが何の絵かを当てるゲームを行った。描写力だけではなく、想像力や英語の語彙力も求められるゲームで、たいへん白熱した。ゲーム中の他愛ない会話は、ハーバード生と距離を縮めるきっかけとなった。

Olympics

各国の HCAP メンバーと HCAP 本部のボードメンバー以外のハーバード生がグループになり、本部のボードメンバーが作ったクイズを解明する速さを競った。各 HCAP 支部の母国語で記述された数字からメッセージを解読したり、日記に記されたある生徒の移動を地図と照らし合わせると文字が浮かび上がる仕組みになっているなど､クイズの内容は趣向が凝らされていて､難易度の高いものだった。東京チームは最も早くクイズを全て解き、その褒賞として HCAP 本部のウェブサイト (https://www.hcapconference.org/tokyo-s-victory-page) に東京チームの活動の様子が掲載された。

Pageant

各国から 1 人または 2 人が選出され、それぞれが歌やダンスなどのパフォーマンスとファッションショーを行い、その中で最も輝く HCAP メンバー 3 人が選出されるという企画であった。以前までは「Mr.HCAP」「Mss.HCAP」と呼ばれていたが、ジェンダーの問題を考慮し、男女という枠組みなしで選考された。東京大学から選出されたメンバーは踊りを披露し、見事第 3 位に選ばれた。

5. 東京カンファレンス 2021

5-1 概要

主催：HCAP 東京大学運営委員会 15 期
共催：HCAP ソウル支部 (Ewha Woman’s University)
日程：2021 年 3 月 19 日（金）~3 月 20 日（土） ※本紙では全て日本時間で記載
参加:HCAP 本部、HCAP バンコク支部、HCAP 香港支部、HCAP 台北支部、HCAP イスタンブール支部、HCAP ムンバイ支部、HCAP シンガポール支部
形式：オンライン（Zoom を使用）

5-2 プログラム詳細報告

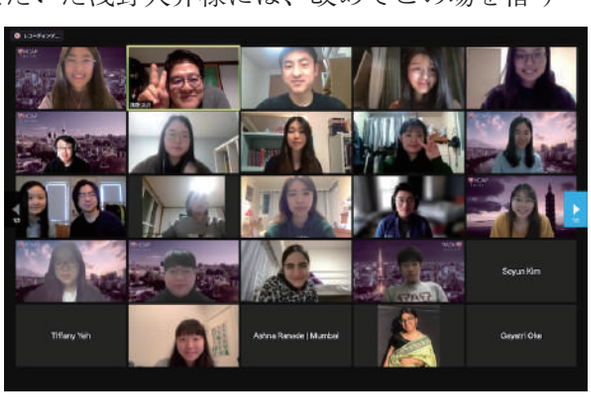
(i) Impact of COVID-19 on Education Systems Around the Globe

【日時】
3/19(金)　22:40-23:40

【企画目的】
・新型コロナウイルス感染症が日本の教育の最前線分野にもたらした変化を知る。
・近年新たな教育方法として注目されている ICT 教育と EdTech について学ぶ。

【企画内容】
　新型コロナウイルス感染症の拡大により、オンライン教育への移行が急激に進んだことについてレクチャーしていただいた。その後、文部科学省が GIGA スクール構想の実現に伴う端末及び通信環境の活用の推進のために展開する StuDX の方針についてご説明いただいた。また、政府が推進する「未来の教室プロジェクト」及び EdTech への支援の詳細もお話しいただいた。

【総括】
　新型コロナウイルス感染症により、オンライン授業の需要が急激に広まるなど、社会の変化に合わせて教育の形態も変化するということを実感を伴って知ることができた。それにより、政府として長い間取り組んできたが一向に現実味を帯びることのなかった GIGA スクール構想に一気にスポットライトがあたり、政策転換の決定的要因となったという話が印象的だった。
　最後になりますが、本企画の開催にあたり御多用の中ご協力いただいた浅野大介様には、改めてこの場を借りて感謝の意を申し上げます。本当にありがとうございました。



(ii) Social: through K-Dramas & Japanese Anime

【日時】
3/20（土）0:30-1:00

【企画目的】
・韓流ドラマとアニメという、それぞれ韓国と日本とを代表する文化作品についてのクイズに企画、参加することを通して両国の文化に親しみ、ソウル・東京チームのメンバーが相互理解を深める
・ハーバード生をはじめとする他国の学生たちにも両文化への関心を一層高めてもらう

【企画内容】
ソウルチーム、東京チームともにパワーポイントスライドを利用したクイズを出題。はじめはソウルチームによる韓流ドラマクイズのパート。1番目のセクションではドラマ内のセリフを予測するクイズ、2番目のセクションにおいてはドラマのシーンから歴史的な背景を推測する問題、3番目のセクションでは恋愛ドラマにおいてどの男性が最終的に主人公と結ばれるかの問い、そして最後の第4セクションでは、ドラマの場面に表れている韓国文化についてのクエスチョンが出された。続く日本パートでは、アニメを主題にしたクイズを出題した。『サマーウォーズ』と『鬼滅の刃』という映画・アニメの一場面を見てもらい、そこに登場する日本食の名前を当ててもらうという形式で行った。回答は司会による「3・2・1」のカウントダウン終了とともにzoomのチャットに書き込んでもらう形で、ソウルチームによる集計がとられ、全クイズを通しての上位者には豪華景品が与えられた。

【総括】
全員参加型のクイズという形式だったこともあり、Online Exchange Conference全体を通しても最も盛り上がった企画のひとつになったと思う。【企画目的】に挙げたような日本・韓国チーム間での文化的相互理解や、アメリカチームなど他国の学生たちから日本・韓国の文化への関心喚起についても、この企画全体を通じて十分に果たすことができた。

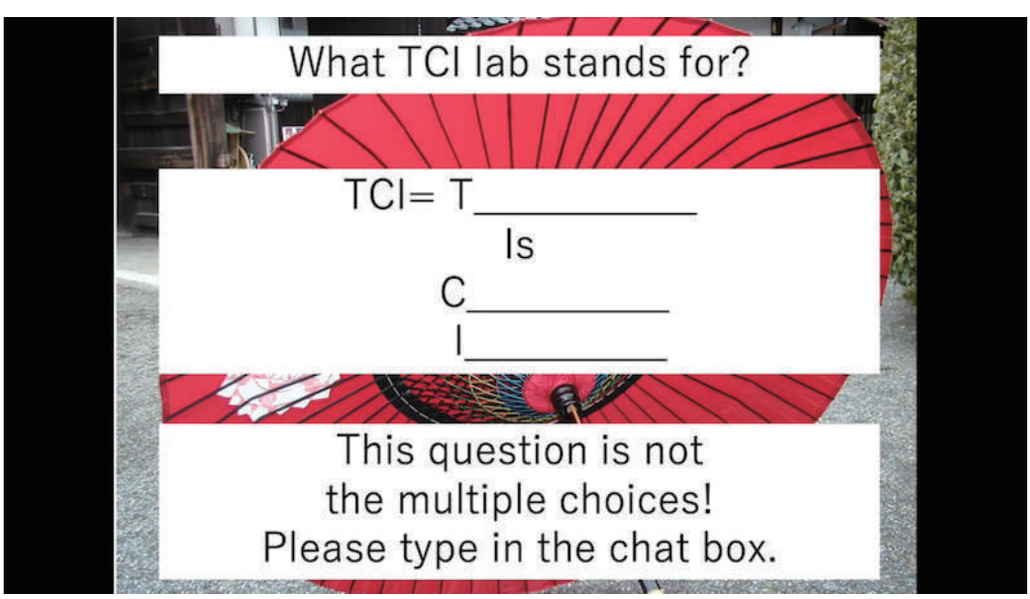
(iii) The Comeback of Hiyoshiya: Revolutionizing Japanese Traditional Handicrafts

【日時】
3/20（土） 9:00-10:00

【企画目的】
・廃業の危機から一転して海外進出を遂げた日本の伝統産業について学ぶ。
・ビジネスにおけるレジリエンスを実現する方法について考える。

【企画内容】
日吉屋五代目当主である西堀耕太郎様に、日本工芸品の老舗がどのように変化する社会に合わせ、その技術を継承しているのかについてのお話を伺った。大学生である私たちが、パンデミックの影響下もしくはパンデミック収束後の社会にどのようにして向き合っていくべきかについてもアドバイスをいただいた。インタビューは事前に行い、クイズを挟みつつ参加者に映像を見てもらった。映像の冒頭では、日本に来ることができなくとも参加者に日本について知ってもらうため、日吉屋が店を構える京都の文化や歴史について紹介した。

【総括】
老舗和傘屋である日吉屋の倒産危機を救った西堀様から、どのような伝統工芸もはじめは新たな技術だったのであって、革新を続けるからこそ伝統として生き残っていくのだというお話をしていただいた。大学生である参加者に向けて、パンデミックの影響でこれまでにも増して急速に変化する社会の中で、変化をピンチだと捉えるのではなくチャンスと捉えて楽しむように、とおっしゃっていたのが印象的だった。海外の学生に日本の伝統を伝えるとともに、伝統工芸という昔から続くビジネスがどのようにして生き残ってきたのかを伝えることで、ビジネスにおけるレジリエンスを実現する方法を考える機会を作ることができた。



(iv) Enjoy Rakugo in English!

【日時】
3/20（土）10:10-11:10

【企画目的】
・英語落語を通じて「変わり続ける伝統芸能」のレジリエンスを発信する。
・日本の伝統的なユーモアを体感してもらう。
・世界各国のユーモアを共有し、異なる笑いを知る。

【企画内容】
英語落語の第一人者である立川志の春様にご出演いただき、落語の紹介をしていただいた後、実際に英語落語を披露していただいた。その後、ブレークアウトルームに分かれ、事前に参加者に準備してもらったそれぞれの国で有名な面白いショートストーリーを披露してもらい、最も面白かったものをナレーション無し・複数の登場人物になりきる落語風にアレンジした。最後にメインルームにおいて、それぞれのルームの代表者がオリジナルの落語を披露した。投票で最も面白かった落語を決定し、立川志の春様から講評をいただいた。

【総括】
イエール大学出身でもある立川志の春様は、”Rakugo isn’t lost by translation”と語り、伝統的な制約の強い落語界で異色を放つ改革者である。伝統を守りつつ、変えるべきものを変えていく信念の強さと落語への愛に圧倒された。今まで落語を観に行ったことがなかったが、カンファレンスの際に披露していただいたいくつかの小噺は今でも内容を思い出せるほど面白く、いつか寄席を観に行きたいと強く感じた。また、後半のセッションでは、世界各地の小噺を聞くことができ、笑いの多様性を感じた。アジア系の学生が多いこともあって、漢字に注目した噺や、中国語の似た発音の言葉から内容がどんどん可笑しくなっていく噺が印象に残っている。最後に、打ち合わせの際に私達２人だけのために落語を披露していただいたことは、私の密かな宝物になった。

(v) Resilience to Natural Disasters ~ The Metropolitan Area Outer Underground Discharge Channel ~

【日時】
3/20（土）11:30-11:45

【企画目的】
・東京のユニークな巨大インフラを通じて、日本の災害レジリエンスのハード面を発信する

【企画内容】
　埼玉県にある首都圏外郭放水路を取材し、歴史的・地形的な説明を加えたうえでその内容を 15 分間の動画にまとめて放送した。首都圏外郭放水路は「地下神殿」として近年人気を博すインフラツーリズムの聖地であり、増水時に洪水頻発地帯である中川・倉松川中流域から江戸川に放水することによって流域の洪水を防いでいる。

【総括】
　取材時にはとにかくその巨大さに圧倒され、見えないところで人々の生活を守る社会インフラの重要性と、この地下巨大建造物を人間が作ったという事実に感動を覚えた。「地下神殿」ばかりが注目される中で、その本来の機能・仕組みに加えて放水路が必要とされた経緯を歴史的・地理的に分かりやすく発信することができた。

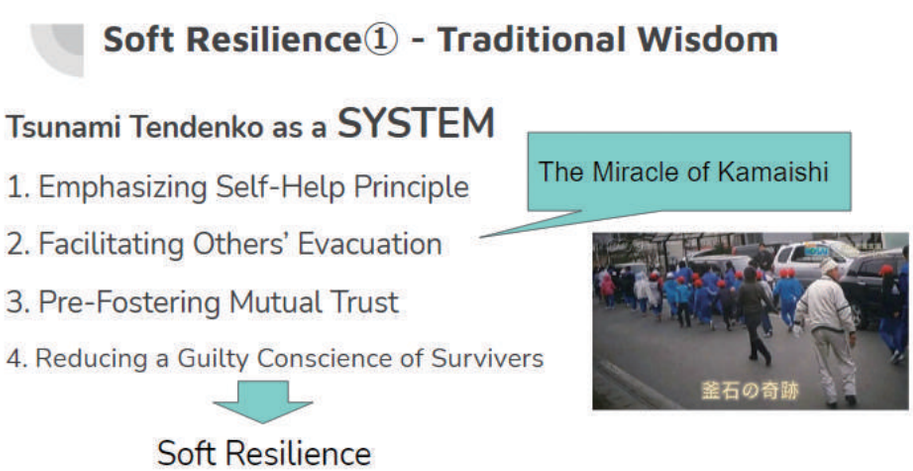
(vi) Resilience to Natural Disasters ~ The 2011 Great Tohoku Earthquake ~

【日時】
3/20（土）11:45-12:30

【企画目的】
・東日本大震災を経験した方のお話を通じて、災害レジリエンスのソフト面を発信する
・東日本大震災について深く学ぶ

【企画内容】
昨年３月は、東日本大震災からちょうど10年を迎えるタイミングだった。株式会社ベネッセコーポレーション尾澤様の全面的なご協力のもと、石巻市で震災を体験し、復興に関わっていらっしゃる島様、武内様、李様にインタビューを行い、学んだことを動画とプレゼンテーションの形で発信した。尾澤様のプレゼンテーションと津波被害についての動画の後、津波てんでんこはただの残酷な言い伝えではなく事前準備を促進して被害を最小限に抑えるシステムとして機能していること、石巻日日新聞の壁新聞に代表される困難な状況を乗り越えるレジリエントなマインドセット、そして「復興」という言葉の本当の意味についてそれぞれ取りあげた。

【総括】
小学校3, 4年で大震災を経験した私達にとって、正直に言って震災の記憶は少し遠いものになっていた。だからこそ、島様・武内様・李様へのインタビューでは震災の生々しい経験を突きつけられ、その重みに圧倒された。今の自分達にできることは何か、震災から学べることは何か、そう考えて企画を練り、動画やプレゼンテーションを作成し、カンファレンスで発表した時間は、今までの人生の中で最も得難い経験の１つだった。オンラインで１時間弱しか取れないことがもどかしく、またインタラクティブにできなかったため参加者にどれほど伝わったかは分からないが、この企画に携わったことで自分自身が学んだことはとてつもなく多かった。お忙しい中インタビューに応じていただいた島様・武内様・李様と、様々な側面から何度も助けていただいた尾澤様に、この場を借りて感謝申し上げます。



5-3 総括

「国際交流」

世界が新型コロナウイルス感染症という未曾有の事態に直面する中、その言葉は大きく揺らぎました。
HCAP も例に漏れず、新たな国際交流への転換を強いられました。
今ここで達成されうる最善の策は何か、試行錯誤を繰り返す日々が続きました。
討議を重ね、当初予定されていた「東京カンファレンス」は、全 7 支部が合同で開催する「Online Exchange Conference」へと形を変え、東京支部はソウル支部と 1 日のカンファレンスを設計する形で纏まりました。

本来は別々に 1 週間程開催する予定で既に考案されていたカンファレンスを、たった 1 日の共同開催に向けて組み直すのはとても難しい作業でした。お互いに気持ちの篭った企画案だからこそ、双方が納得するまでには時間がかかりました。タイムスケジュールや企画の折衷案を提示し、合意を形成するプロセスを丁寧に行ったことが、大変印象深く残っています。

当初は事務的で、ぎこちなかったソウル支部とのやり取り。「より良いカンファレンスを創りたい」という目標を共有したことで、徐々に仲は深まってゆきました。深夜に内緒話をしたり (何を話したのかはもちろん秘密です！)、皆でちょっと怖いドラえもんのイラストに SNS のアイコンを揃えたりしたことは、良い思い出です。

目と目を合わせ、空気の振動を感じ、肌の温度に触れ合い、熱狂の渦にのまれる…
もちろん、同一空間を共有するに勝るものはないでしょう。

しかし、オンラインという形式だからこそ実現できたことも多くあります。
例えば、例年では体験できなかったこととして、
・他国支部の学生と濃密な交流ができたこと
・全支部の開催するカンファレンスに参加できたこと
などがあげられます。

画面越しに皆でボリウッドダンスを踊ったり、深夜までクイズに取り組んだり、カンファレンスは盛会のうちに幕を閉じました。

オンラインでの国際交流がこんなにも楽しく、有意義なものであるとは思いもしませんでした。

今年度のカンファレンスのテーマは、「Resilience & Reform: Adopting to a Changing World」でした。全支部のメンバーが新型コロナウイルス感染症による制約を受けて悔しさを感じてもがきながら、「より良いオンラインカンファレンスを創り上げる」という目標に向けて走り抜けたその姿が、まさにそのテーマを体現していたように思います。

最後にはなりますが、不安定な時流にカンファレンス開催に漕ぎ着けたのは、先行きの見えない活動をご理解、ご支援いただいた皆様のおかげです。この場をお借りし、重ねて厚く御礼申し上げます。

この一年、ある目標に向けて準備をしたものが道半ばで途絶える場面が幾つもありました。それを無駄な時間としてではなく良き糧とし、レジリエントにこの不確実な時代を生きてゆくという決意のもと、筆を擱かせていただきます。

HCAP 東京大学運営委員会 15 期渉外
岡本 琳南

6. HCAP15 期独自企画

6-1 概要

新型コロナウイルス感染症拡大によるハーバードカンファレンス、東京カンファレンスの短縮オンライン開催を受け、例年のカンファレンスのような経験を得ることは困難になりました。そこで、HCAP15 期としての 1 年間に何を求め、どう活動するかを改めて問い直しました。

「独自企画」は、

①気づきを得る

②目標を実行に移すためのヒューマンネットワーク構築

③大学 1 年生としての自由な創造体験

④「面白いこと」の追究

⑤社会とのつながりを持つ

の 5 つを目的として、HCAP15 期の各メンバーの興味を探究するよう打ち立てられました。

「HCAP とは何か」を問い続けたて実現された、HCAP Tokyo として代々踏襲される活動の枠を超えた初の試みとなります。

緊急事態宣言等の影響を受け、幾つかの企画はやむをえず中止となりましたが、そのほかの企画では変更に変更を重ねながらも、実施に漕ぎ着けることができました。

本企画は、上記 5 つの目的を達成するという観点から、外部の方々のご協力なしに成功裏に実施することはできませんでした。この場をお借りし、多大なるお力添えを賜った皆様に、心より感謝の意を表します。誠にありがとうございました。

6-2 プログラム詳細報告

(i) Sanctity of Life and Death with Dignity

【日時】

3/3 (水) 17:00-22:00

【参加者】

ライデン大学 / 大学院の学生 6 名

ジュネーヴ大学 / 大学院の学生 7 名

ジュネーヴ大学教授 1 名

HCAP15 期 6 名

【企画目的】

「死」を選ぶ権利という議論を醸すテーマについて安楽死や自殺幇助を認める国で学ぶジュネーブ大学、ライデン大学の学生と語り合い、また、自殺幇助を提供するスイスの団体 DIGNITAS のゲストから話を聞くことで、死ぬ権利について考える。

【企画内容】

第 1 部「24 & ready to die」を視聴し、ワールドカフェ方式で意見交換

精神的な苦痛を持つ 20 代のオランダ人女性 Emily が安楽死を選ぶまでのドキュメンタリーを視聴。その後 3 名程度の少人数に分かれ、精神の苦痛を理由にした安楽死の是非や、命の所有者は誰かといったテーマで意見を交換した。その後、ワールドカフェ方式でメンバーを入れ替えて再度意見交換を行い、全体でも意見の共有をした。政治学を専攻する学生による、「請求権」「自由権」という法的な論点や、命は両親やその祖先から受け継いだものとしても捉えられるという点が特に盛り上がった。

第 2 部 参加者の交流会

参加者の間でフリートークをしながら交流をした。ライデン大学からの参加者の多くは、日本語学科の教授にコンタクトをとったこともあって、日本語を流暢に話す学生が多かった。日本で医師として勤務する中で安楽死や尊厳死に関心を持ち、現在ライデン大学院で生命倫理を学ぶ学生もいるなど、多様なバックグラウンドが垣間見えた。

第 3 部 スイスの自殺幇助団体・DIGNITAS による講演と Q&A

DIGNITAS は、スイスに拠点を置き、”死ぬ権利” を訴え、実際に医師と看護師により自殺幇助を行う団体である。DIGNITAS のスタッフで弁護士でもある Silvan Luley 氏を招いて講演をいただいたのち、質疑応答の時間を設けた。

DIGNITAS の理念や運営に関する講演では、DIGNITAS の使命は苦しまずに命を絶つ選択肢を提供することにすぎないという話から、安楽死を望む人のうち、実際に死を選ぶ割合は 1 割と多くないことなど、団体の理念や安楽死に関する現状をお話しいただいた。

質疑応答による意見交換は、参加者が自分の死に対する価値観をぶつける実りのある時間となった。例えば、精神科医として働きながら大学院に通う学生は、精神科医としては生きるということに大きな価値を感じており、どのような形であれ死を選択肢として提示することは理解に苦しむと胸のうちを明かしていた。

【総括】

「死」とは何かという問いに向き合う、大変貴重で充実した時間であった。企画を終えて、人が自分で死を選択しようとするのはどのような瞬間かを考えた。そして、それこそが生命に優劣をつける瞬間なのではないかと思った。今までの自分の生のあり方とこれからの生とを比べ、今までの生の方が充実感があると感じた時、あるいは自分の生と他者の生とを比べ、他者の生を羨む時に、私たちは自らの生を悲観し、死を求めるのではないだろうかと感じた。この企画を通じて、「死ぬ権利は何か」という問いに向き合い、思考を続けようと思うことができた。最後に、この場をお借りしてご協力いただいたジュネーヴ大学の Samia Hurst 教授、ライデン大学の Michon Leenders 氏、DIGNITAS の Silvan Luley 氏、また参加をいただいた全学生に心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

(ii) セックスワークを知る

【日時】3/5（土）11:00~17:00

【企画目的】

新型コロナウイルスの流行により「夜の街」として一括りにされ、今まで以上に社会的偏見や無理解・無関心の的となっている風俗業界について、風俗に携わる人たちがどのような思いを持って働いているのか、どのような悩みを抱えているのかを知り、真剣に考えること。

【企画内容】

第１部 「JK ビジネス」スタディツアー

一般社団法人ホワイトハンズ代表理事の坂爪様より、JK ビジネスについて 50 分の基礎講義と、実際に派遣型リフレ店を営業されている店長とその店で働かれているキャストさんに 60 分ずつインタビューを行った。講義では JK ビジネスの変遷や種類、風俗やパパ活との違い、法律による規制、各アクターのメリットについて学んだ。派遣型リフレ店を営業されている方のインタビューでは、ご自身がお店を始めたキッカケ、具体的な運営方法、警察による取り締まりなど、様々な質問について詳しく丁寧に答えていただいた。最後に、キャストさんのインタビューでは、私達と同世代ということもあり、仕事内容やコツだけではなく、好きなものや人生観などについても話し合うことができた。

第２部 「夜の世界」ワークショップ

風俗業界で働いている女性のセカンドキャリア支援を行う GrowAsPeople(GAP) 様にご協力いただき、風俗業界についてワークショップを行った。クイズ形式で「夜の世界」の疑問点や誤って認識されている点を確認した後、GAP 様の行っているセカンドキャリア支援事業の説明と新型コロナウイルスの影響についてお話いただいた。年齢を重ねるほどにお金を稼ぐのが難しくなり、また誰にも言えずに孤独を抱える人が多い「夜の世界」において、キャストさんのセカンドキャリアを支援するのみならず、なんでも話せる相談相手として GAP 様のような支援団体がなくてはならない役割を担っていることを感じた。

また、3 名限定ではあったが、GAP 様が支援者限定で行っている「夜の世界スタディツアー」に参加させていただき、キャストさんと店舗を運営する男性スタッフのお話を聞くこともできた。

【総括】

普段は目を背けている「性」の問題について向き合い、JK ビジネスや風俗業界について知識を得ただけではなく、どのような人が、どのようなキッカケで、どのような思いで働いているのかを知ることができた。特に、第１部でインタビューさせていただいたキャストさんが楽しんで働いているのが印象的だった。「夜の街」として偏見の対象にするのではなくシンプルに１人の労働者として捉えるべきであるという議論も、実際にキャストさんや経営者の方とお話する中で納得できるようになった。

一方で、そのような認識があっても、未だに自分自身がこの業界で働きたいとは感じないし、自分の周囲の人間が働いていてほしくないと思うことも事実だった。そして、このような企画の一環として私達が興味を持って話を聞いているという構図そのものについても、違和感を感じざるを得なかった。なぜ私達は性に深く関わることを忌避するのか、1 人 1 人が何かしらのモヤモヤを抱き、それをぶつけ合うことができた、価値のある時間になった。最後に、この場を借りてご協力いただいたホワイトハンズ様と GrowAsPeople 様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

(iii) ドラマトゥルギー

【日時】3/5（土）18:00~22:00

【企画目的】

演劇鑑賞を通じ、自分でないものを「演じる」ことの意味と、人を惹きつける笑いを生み出す構造について考察する。

【企画内容】

こまばアゴラ劇場にて『オポンパン☆ナイト～ほほえむうれひ～』(『サンセット』『てんびんぼう』『bikeshed』の短編 3 部構成) を鑑賞した。その後、それぞれの短編についてディスカッションを行い、どのような構図で笑いが生み出されていたのか、それぞれの構図の違いは何かについて話し合った。

【総括】

コロナウイルスの影響で、演劇のワークショップや実際に演者の方に話を聞くことは出来なかったが、その分自分達で自由に演劇を分析し、考察することができた。それぞれが思い描く理想的な演劇の違いも垣間見ることができ、とても興味深い企画となった。

(iv) 近未来の食卓を想像せよ！

【日時】3/4（水）20:00~22:00

【参加者】
・HCAP15 期
・Aleph Farms
Dr. Neta Lavon, Vice President of Research and Development
Mr. Gary Brenner, VP Market Development
・募集した参加者約 20 名

【企画目的】
・食の未来を作り出す現場を体感し、未来の食卓に思いを巡らせる
・未来を切り拓く人たちの持つ情熱とエネルギーに触れ、自分自身の「ワクワクするもの」への姿勢を問い直す。

【企画内容】
第 1 部　Lavon 氏による培養肉の生産についての科学的な分析の講義
第 2 部　Brenner 氏による培養肉の可能性とマーケティング手法の講義

食肉は環境に大きな負荷をかけるため、plant-based meet と cell-cutured meet(培養肉) という 2 つの代替案が検討されている。人々は肉を「感じたい」ため、その点で培養肉は優れている。培養肉のメリットは他にも、地域によって異なる脂肪・厚さ・硬さなどの好みに対応できること、鉄分や脂肪の調整が可能なこと、ハラールへの対応や抗生物質を使用しないなどコントロールが容易であること、トレーサビリティが確保できることなどがある。

しかし、培養肉の普及には 2 つの大きな懸念点がある。1 つ目は、生産コストを食肉の水準まで下げられるかという問題であり、第 1 部の講義において技術革新によって徐々に下げられることを説明していただいた。2 点目は、培養肉は途上国の産業基盤を奪う可能性があり、そのため進出を許可されないのではないかという懸念である。これに対して、第 2 部の講義では、培養肉は既存の産業の延長に過ぎず、Replace するのではなく補完関係にあることが強調された。途上国は既に土地の不足などの問題に直面しており、またバイオテクノロジーを学んだ若い世代の雇用にもつながるので、むしろ途上国では歓迎されると説明された。

【総括】
現状では対応できない食肉需要を培養肉が補い、徐々に代替していく。不要になった牧場が過度な開発にあわないように規制しつつ、地球環境への影響や飢餓を緩和する。培養肉という技術が実現できる素晴らしい未来に思いを馳せ、世界を変える技術の最先端を目撃することができた。しかし、同時に培養肉は、自分の知らないところで生まれ、殺され、切られた肉をなんの想像力もなく食べる状態、すなわち人間生活から外部化されてしまった畜産業が、さらに外部化されていく危険性を秘めている。新しい技術を活かし、環境に配慮しつつも、どこかで畜産を再び生活に近づけ、私達の食べる「肉」がどこから来たものなのか、忘れないようにする努力が必要だと感じた。最後に、企画にご協力いただいた Aleph Farms の Neta Lavon 氏、Gary Brenner 氏にこの場を借りて感謝申し上げます。ありがとうございました。

(v) シナリオプランニング

【日時】3 月 26 日（金）13:00-16:30

【参加者】
・キリンホールディングス Kirin Well-being Design Lab 社員 2 名
・HCAP15 期 5 名
・募集した参加者 7 名

【企画目的】
常に社会を構成する様々な要因にさらされ、変化の激しい教育業界の未来をシナリオプランニングの手法を用いて予測することで、教育との関わりにおいて未来の社会を描き、未来へ向かう現在を客観的に評価する。

【企画内容】
本企画は、キリンホールディングスの未来シナリオ会議とのコラボレーションにより実施された。まず、Kirin Well-being Design Lab が監修する 4 つの未来シナリオから選択したシナリオ K の概要を社員さんより説明して頂いた。未来シナリオ K での暮らしを想像し、ブレインストーミングをした。続いて、とりわけ教育の分野でどのような課題が生まれるかを各自で考案してグループでさらに深堀したのち、全体で共有を行った。その後、現在進んでいる先進的な教育の方法について Kirin Well-being Design Lab の社員さんによりご紹介いただいた。グループワークで出たシナリオ K において想定される教育での課題を踏まえて、新たな教育についてのアイデア提案を行い、チームの代表者が全体で共有を行った。

【総括】
活発な意見交換が行われ、有意義な会となった。特に新たな教育についての斬新なアイデアが提案され、起こりうる未来のシナリオを想定することで発想が広がるのだと感じた。例えば、「子どもたち」の「大きな夢が持てない」という課題に対して、人物と背景に着目した歴史教育を行うというアイデアを提案した参加者がいた。社会に大きな変化をもたらした個人が、どのように逆境を克服したかなどを具体的に学び、歴史は変えられるという希望を持たせたいという思いからだという。このように、歴史的な出来事や変革を事柄として暗記する教育から、「今の社会をどう生きたいか」という視点から学ぶ未来志向の教育へと転換を目指す画期的な案が飛び交った。最後に、多大なるご協力をいただいたキリンホールディングス Kirin Well-being Design Lab の栗田様、中澤様、峯岸様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

(vi) “水の古都” 東京

【日時】3 月 31 日（水）9:00~17:00

【企画目的】
・東京と河川との関係性を認識すること
・江戸から東京への” つながり” と” 断絶” を感じること

【企画内容】
前日に知花先生より河川についての講義を 90 分程度していただいた。当日は南砂町駅に集合し、知花先生の研究室の方数名と共に自転車で移動した。地盤沈下観測所から荒川に向かい、高潮堤防などを見た後、葛西側で旧河道をたどりつつ北上した。中堤を経て葛西橋を渡り、荒川ロックゲート内とスーパー堤防を見学した後小名木川などに沿って東に向かい、仙台堀川や横十間川を見ながら東陽町駅にて解散した。

【総括】
何も知らなければ素通りしてしまうような場所の1つ1つがとても重要な役割をはたしていたり、面白いストーリーが隠されていたりすることが記憶に残った。特に、一般に防災と親水性はトレードオフの関係にあるのに対し、双方を実現できるスーパー堤防というアイデアと、それに対する議論が非常に面白かった。多くの運河がコンクリートに蓋をされたが、今でも河川とそこに住む人の生活が密接に結びついていると感じた。最後に、この場を借りてご協力いただいた知花先生に感謝申し上げます。ありがとうございました。

Revenue and expense

支出

項目	金額（円）
合宿費	49,593 円
場所代	12,000 円
ハーバードカンファレンス	
動画制作	5,507 円
雑費	3,526 円
東京カンファレンス	
日吉屋	12,145 円
英語落語	15,110 円
企画賞金	17,471 円
災害レジリエンス	4,775 円
独自企画	
夜の街	20,275 円
書評会	6,205 円
水の古都東京	18,330 円
演劇	23,400 円
雑費	4,095 円
新歓活動	11,262 円
新歓合宿	20,000 円
計	223,694 円

収入

項目	金額（円）
駒場友の会繰越金	100,000 円
ベネッセコーポレーション	130,000 円
プレジデント社	30,500 円
装備売却	1,000 円
計	261,500 円

※14 期からの繰越金は 275,765 円でした